

No. 116	ばとこいあ通信	SONG FOR THE PEOPLE BY THE PEOPLE
発行日 2021. 1. 17		編集 千松 幸夫
発行：ばとこいあ神戸事務局		
事務局： 尼崎市築地5丁目3-12 千松 宛 Tel : 090-8216-1243	E-mail : batokoia-kobe @imail.plala.or.jp ホームページ： http://www9.plala.or.jp/batokoia/	

隆二郎の7回忌です

帰らぬ旅に出たから6年経ちました

6年前の2015年9月に「安全保障関連法」が成立した。彼、隆二郎は以前からこの法案に危惧を抱いていたが、その成立を見ることもなく「帰ることのない長い旅」に旅立った。また10月には安倍政権は「辺野古」米軍基地工事の本体工事に着工した。

1972年の「沖縄返還」から沖縄の問題に傾注していた彼にとって生きていれば断腸の思いだろう。



ばとこいあ神戸 第83回 2014.12.14 より

あなたが歌い手で、詩人で、演奏家で、語り手であるなら、あなたの怒りや悲しみをあなた自身の表現方法で伝えて欲しい。そんな場が「ばとこいあ神戸」だ！

ばとこいあ神戸には、大昔長髪で髭面で新宿西口で歌っていたシンガーもいる。またあまりプロテストの歌を唄わないシンガーもいていい空間を醸し出している。

しかし黙ってはいられない、あんたも俺も表現者なんだ、短い時間だけでも語って、歌って、キャッチボールして輪を広げていこう。

ばとこいあ通信 第79号 より

2020年12月13日(日)

神戸学生青年センター・スタジオ

参加者6名(表現者5組5名)

コロナ過で、大阪・兵庫を始めとして全国的にコロナ陽性者・重症者が増加して参加者が済まなかったが、僕も参加できて楽しい時間を過ごしたよ。十分に感染予防をしていれば「自粛」「自粛」とお題目を唱えなくても大丈夫なんだ。万一感染してしまえばあきらめるしかないよね・・・。



👉 会場風景 👈



👉 宮崎 隆(根津実)さん



👉 中山 けんいちさん





👉 矢谷 トモヨシさん



👉 岸田 善行さん



👉 土山 恵子さん





👉 土山 恵子さん



Photo by Yukio Senmatsu

『ばとこいあ神戸』こもごも

『ばとこいあ神戸』の歴史 その29

千松 幸夫

【第2部】第Ⅱ期『ばとこいあ神戸』

【第21章】たんぽぽの宴、第50回 ～ 第53回

2008年2月22日(土)。雨。伊丹の「てえげてえげ食堂 きゅらむん」での開催。隆二郎の娘さん(小林理絵さん)とその仲間が企画・運営した。惜しむらくはこの1回で終わってしまったことだ。ただ彼女らの中に事実として残ったことで、あとは今の自分やその周りの状況に外挿出来るかだがそれは一人一人の問題だ。

表現や行動が制限される、というのはどういう状況なのだろうか。

自分達のおかれている現状を顧みても、寧ろ表現の自由を声高に掲げ、それを制限しようとするものを批判する傾向にある。それが現代では当たり前になり、表現を制限される事はひと昔もふた昔も前の事のようにすら思える。ただただ、過去の話として私の中に植え付けられているのが事実だ。

今回のイベントで、それは覆された。

過去の事でしか無いと思っていた事が、21世紀の現代に実際起こっている。

場所は台湾。近いようで遠い、遠いようで近い、そんな国。

行った事も無い。知り合いがいる訳でも無い。私にとっては単にアジアの国のひとつというだけで、それ以上でもそれ以下でも無い。正直、こういうイベントが無ければ気にする事も無かっただろう。それでも、その国で起こっている事は、私の常識を覆すものだった。

隆二郎氏から語られる台湾の現状。表現の弾圧、学生運動。まるで、聞いた事しか無い、自分が産まれる前の日本のような現状。それが現代に実際に起こっている。

「いや、今西暦何年だよ！」と言いたくなってしまうが、哀しい哉現代の話なのだ。

台湾でそんな事が起こっているなんて話は、このイベントに関わらせて頂くまで全く知らなかった。自分にとってはまるで対岸の火事のような話で、多分こういう事でも無ければ一生知る事も無かっただろうと思う。

寧ろ、一体どこへ目を向けたらこれを知る事が出来たのだろうか。今まで関心が無かったとは言え、余りにもこの情報が入って来なかったようにも思う。もしかしたら自分の関心が希薄過ぎただけなのかもしれない。

いが、日本の感覚からすれば、大々的に取り上げられてもいいような事の筈なのに。それも台湾の現状という事なのだろうか。

実際に台湾の現状を見て、体感されて来た隆二郎氏がこうして語ってくれた事によって、少なくともそれまで全く台湾の現在に関心の無かった私が、台湾で起こっている、到底考えられないような状況を知る事が出来た事は、非常に有意義な事だったと思う。

勿論、私ひとりで出来る事は殆ど何も無い。出来る事は何も無いけれど「知る」事は出来る。それだけでも全く違うのではないだろうか。

台湾の現状を知る人がもっと増えれば何か変わるかもしれない。台湾には実際に訴え続けている人々がいる。知らせる人、訴える人、その声に耳を傾ける人はこれから増えていくと思う。その声がずっと届かないなんて事はあってはならないと思うから。

(「ばとこいあ通信」第47号より)



第50回は2009年4月11日(土)。場所は神戸学生青年センター・スタジオ。参加者5名(表現者5組5名)。晴れ。

戦後の日本と台湾の関係を文献等で調べてみた。台湾はかつての日清戦争後に日本の植民地となった。それ以降現在に至るまで台湾民衆に対する無知と無理解がはびこってきた。その理由は日本軍国主義の清算の中断と歴史的責任の所在の解明と決着があいまいなまま封印されたからだ。

1952年4月28日サンフランシスコ平和条約の発効と同じ日に日台平和条約が調印された。そしてアメリカ主導の反共巻き返し戦略のもと国民党にとっては延命のための跳躍点を手に入れること、日本にとっては対日賠償放棄の獲得と戦犯政治家や戦犯企業の戦争犯罪の清算免責の実現をはかることという双方の目的が合致した結果に他ならない。

その間、台湾では1947年『2・28事件』から1950年代白色テロルへと、韓国では1948年済州島『4・3事件』へと、いずれの地でも恐怖政治が展開されたが、日本はその抑圧政策を一貫して支持・援助し、両国の民衆に敵対してきた。それには3つの意味があった。

第一に、独裁政権を政治的・経済的に支持することで民衆への抑圧を認知したこと。

第二に、それと引き換えに自らの植民地支配と戦争責任の追及を免れ、過去を隠蔽したこと。

第三に、独裁政権との癒着を通じて経済侵略（高雄市の南部、空港周辺に1977年ころ貿易加工区があり、多くの日本の企業が進出していたことを私は目撃している）を果たすことによって、現地の民衆からの収奪・搾取の実を上げたこと。

その結果、そうした構造をもつ冷戦体制と高度成長というシステムの中で、私たちは経済的にはそれなりに安定した日常生活を営むようになり、個々の差はあれ、国家と企業に自己を同化させてゆくことでその安定はおおむね保証されることとなる。その過程は戦前の歴史を風化解体し、また同時代の近隣諸国の民衆の現実へのまなざしを曇らせ、視野から欠落させていく道のりでもあった。

私たちは今、このことの重大な意味を、改めて問われているのではないだろうか。今一度、深く見知ることの必要を痛感した旅であった。

（「ばとこいあ通信」第47号より）



☞ 澄田 好信さん

隆二郎 ☞



☞ 土山 恵子さん

淵野 友美さん ☞



☞ 隆二郎
矢谷 トモヨシさん

矢谷 トモヨシさん ☞



第51回は2009年6月6日(土)。場所は神戸学生青年センター・スタジオ。参加者5名(表現者4組4名)。曇りのち晴れ。2008年から2009年は参加者が一桁という時が続いた。若干倦怠期だったのかな…。

今年の4月、6月と参加者が急激に少なくなり、6月なんかは19時15分頃まで隆二郎、千松の2名という状況であった。

19時30分を過ぎて中野さん、伊藤くん、矢谷さんの参加があった。しかし、ここで隆二郎より緊急提案があり、急遽「ばとこいあ神戸」の現状分析とこれからの対策に関しての意見交換の場を持つことにした。本来ならもう少し早い時期にこのような場を多くの参加者がいる時にもつべきだった。

なぜなら、ばとこいあ神戸の表現空間は一部の事務局スタッフが設定、提供するものではなく、これだけ長く続けてきたのだから当然のこと参加者、表現者たちの多くの意見を取り入れ、会を重ねるごとに面白くしていくことを基本としてきたが、ともすれば忙しさにかまけお座なりの場を続けてしまっていた。そうするとマンネリに落ち込み、興味が半減されてしまい、参加者や表現者は休みがちになってしまい最後には参加者も来なくなり会そのものが消滅していく。

会というか空間を創ることの大変さを十分知っているのに、同じ過ちを繰り返して、今までどれだけ多くの面白い会が消えてしまい、気がつけば何もない状況に寂しい思いを繰り返してきたことか。

当然事務局スタッフの責任も大きい、スタッフの人数が少ない、忙しい、限界だ、これらは当然遭遇する課題で、避けられない事実だ。しかし理由にはならない。

だからこそみんなで創り続けることが重要で、表現者同士のキャッチボールが面白い空間を作り出していく。

会や空間を消滅させることはたやすい事、しかしそれはある種の発展的な要素や可能性を芽生えさせるか、もしくはそれらを残すことが出来る状況にあることが望ましい。

そのためには若い表現者たちの、斬新で私たちが思いつかないような意見やアイデアを聞くことも必要な時期に来ていると思う。

最後に参加者と表現者の皆さんにお願いします、友人か仲間の方にも今一度声をかけ、「ばとこいあ神戸」への参加をお誘いください。

(「ばとこいあ通信」第49号より)

ということでこの回の写真はありません。

2009年7月9日から13日の「2009緑島・和平・対話人権芸術季」については次号で・・・。

第52回は2009年8月8日(土)。場所は神戸学生青年センター・スタジオ。参加者8名(表現者7組7名)。晴れ。

台湾から帰ってきて1月足らずでまだ内容が消化出来ていなかったし、まだ参加者の少なさに打ちひしがれて（はいなかってが）いた状況でした。

旅に出て、そこから日本を見ることの重要性を知ったのは、はるか昔、全日本フォークジャンボリーのサブステージに出た後、三里塚の戸村一作さんを訪ね三里塚闘争の現状をお聞かせ願った時だ。その話の最後に、戸村さんは「君は沖縄に行ったことがあるか？まだならぜひ行くといい、そうして今の日本を見ることだよ、きっと本当のことが見えてくると思う」と話して頂いたのがきっかけだ。それ以降沖縄やアメリカ、インド、タイなどを旅し、その都度日本を見つめ続けてきた。そこでは驚愕のカルチャーショックをうけた。そして日本のマスコミと政府の嘘を知ることにも出来たし、日本の歴史の闇を見ることも出来た。

今回の台湾での旅も同様、台湾から日本を見ることで日本の歴史的事実と向き合う一連の動きの中で、特に、台湾原住民の人たちと知り合い、話し合うことで多くの事実を知ることが出来た。

日清・日露戦争後に日本が台湾で植民地政策を行ったことは現在でも十分な検証が行われていない、そのため日本国内では、今だに多くの人たちは侵略された国の人々の心情を理解できないままだ。

かって小泉が首相時代に6回も靖国神社に参拝し、その度に中国・韓国・台湾の政府や民間人から強い抗議を受けた。しかし台湾政府や民間人からの強い抗議を知っている人は何人いただろう？そうしたなか今回台東でお会いした都蘭村から参加された原住民の男性から「日本人監督の井上修さんが撮影したドキュメンタリー映画、『出草之歌 台湾原住民の呐喊 背山一戦』を見ましたか」と聞かれ、恥ずかしながら「見てない」と答えると、彼は通訳を通じて映画の内容を話してくれた。

「出草」とは「首狩り」を意味し、「出草之歌」とは「蛮刀を研ぎ澄まし、侵してくる敵に対し戦いを挑む歌」であり。「背山一戦」とは「山を背にして退路を断った決死の戦い」のことだと言う。

内容に入ろう、第二次世界大戦で「日本兵」として戦死し、靖国神社に合祀された先祖の霊を取り返そうと闘う「台湾原住民」の姿を追ったもので、映画全篇に台湾原住民の古来からの歌が流れ、部族の女性リーダー「チワス・アリ」を中心に展開されている。ここで私たちが考えなければならないのは、何故、台湾原住民が日本兵として徴兵され「高砂義勇隊」となったかと言う経緯です。（その前に「台湾原住民」という呼称の由来の説明から、台湾の人口約2300万人の内、ほとんどはかつて中国から渡って来た「漢族」の人たちだ。しかしその漢族が住み着く以前、より古くから住み着いていた約40万人の「原住民族」がいる。この原住民族の中には、タイヤル族、ブヌン族、パイワン族等約13部族がある、日本時代には「高砂族」、戦後中華民国政府には「高山族」や「山胞」と呼ばれていた。これら全ては植民者が勝手に付けた呼称だ。90年代に入り台湾原住民らは歴史上初めて自らの意思で「元からこの地に暮らしていたもの」という意味を込めて「原住民族」と名乗り始め、

1994年に「台湾原住民」という正式な呼称が台湾の憲法に記載された。)日清戦争後の1895年、日本は台湾を植民地として支配し始める。その直後に台湾総督府は身勝手な法令で台湾原住民族の土地を強制的に奪っていった。

当時の原住民族は全くの無権利状態におかれ、日本の総督府の意のままに搾取、抑圧されていた。危機に瀕した原住民族は各地で日本植民者に対し激しい抵抗運動を展開した。その抵抗に対し総督府は武力を行使し殺戮を繰り返した。

そして生き残った人々に対し、徹底した「同化＝皇民化」政策を推進し、天皇神道信仰で洗脳するのだ。1942年侵略戦争の南下に伴い、日本は台湾原住民の青年を中心に「高砂義勇隊」を編成し。2万人あまりを南洋戦線に送り込んだ。このときの「高砂義勇隊」は名目上「募集」となっているが、実際は多くの日本人警官が原住民集落を回り、選出指名したものに他ならない。当時の警官は全員日本人で、原住民族の「生殺与奪」権を握る、集落の絶対権力者であった。「高砂義勇隊」はその後も多く南方戦線に送られ、戦争の消耗品にされ続けた。

戦後、靖国神社は、高砂義勇隊の戦没者を遺族に無断で、戦争指導者と同列に合祀した。これに対し、原住民は「返我祖霊(ファン・ウオ・ス・リン)」のスローガンのもと、日本政府と靖国神社を相手取り、合祀の取り下げ訴訟をおこした。しかし現在もまだ日本政府と靖国神社は無視し続けている。

原住民の「返我祖霊(ファン・ウオ・ス・リン)」の思い、この底辺にあるのは50年に及ぶ日本による植民地支配と、その後の国民党政権の白色テロルのもと、自らの歴史アイデンティティに目覚めたからだ。

この映画も見ていないので、これ以上は、原住民の人たちから聞いた話と参考資料、実際に見学学習した、台東の卑南にある国立台湾史前文化博物館の文献資料により、書いたが続きは映画を見ることだ。何とかして作品を手に入れ、鑑賞し、続きをまとめたたいし、あなたにもまとめたいずれにせよ私の知らなかった昭和史の闇の部分がまた一つ、台湾で見え始めた。



👉 藤原 正志 さん



中野 誠三さん 👈



👉 ジョーゼット加藤(加十)さん



中嶋 初恵さん 👈



👉 渡辺 博昭さん

隆二郎 👈



第53回は2009年10月3日(土)。場所は神戸学生青年センター・スタジオ。参加者8名(表現者6組7名)。晴れ。

2月14日(日)に、ここ六甲学生青年センターの大ホールで開催された「詩の朗読と津軽三味線の共演」は素晴らしく感動的で楽しかった。津軽三味線の奏者、山本竹勇さんの音色に乗せての詩を朗読、四名の詩人の個性が聞き手をそれぞれ違った世界へと引きずり込んでいく。私には詩を朗読されていると言うより歌われていると思えてならなかった。そう、「うた」を聴いていたのだ。三味線の音色は日常の音、風が木々や草原の草を揺らす音であったり、季節の風そのものの音が日差しの中を、夜の闇を駆け抜ける言霊の如く聞こえてくる。そしていつの間にか三味線が詩人と「詩(うた)」を見事に紡ぎ情念の世界を描き出していく。

私が津軽三味線と始めて出会ったのは、もう40年も前の頃。肩までの髪とひげ面、洗いさらしのジーンズをはき真冬の津軽、五能線沿いに旅していた時のことだ。あてもなく陸奥岩崎駅で雪まみれの2両編成のジーゼル列車を降り、駅員に安い宿を教えてもらい、そこを訪ねた。駅から連絡があったのか小雪が舞う宿の玄関先に初老の上品な女性が私を待っていてくれた。

聞くとこんな平日の厳冬の時期に泊り客はまれで、今日は私1人だという。古びた小さな宿だが廊下も柱もきれいに磨き込まれていた。

通されたのは12畳ほどの部屋で、部屋の真ん中に囲炉裏があって、吊り下げられた鉄瓶から湯気が立ち上がっていた。冷えた身体に熱いお茶が染み渡る。囲炉裏のそばには、形は悪いがみずみずしいリンゴが筥に入れられ御茶宛として出されていた。

迎えてくれた女性はこの宿の女将で、リンゴの皮を剥きながら、次々と話しかけてきた。だけど女将の言葉は強い訛り言葉で何度も何度も聞き返すので話が前に進まない。気まずい雰囲気になりかけた時、宿を教えてくれた駅員が部屋に入ってきた。

聞くとこの宿は彼の母親が営んでいると言う、母親の女将に彼は二言三言話すと、一升瓶を私に手渡し「飲んでくれ」と言い部屋を出て行き、すぐに着物に着替え、手には三味線を持ってきて、囲炉裏をはさんで座り、茶碗に酒を入れ一気に飲むと三味線を弾き始めた。間近で聞く津軽三味線の音は、時に身体に突き刺さり、時に身体を優しく転がるように撫でてくれる。目を閉じると、さっきまで歩いていた五能線沿いの海が映し出されてきた。鉛色の海と空から突然湧き出してくる白く砕けた波頭、その間から三味線の音色が生まれてくるように思えるのだった。囲炉裏の温

もりと酒の酔いで火照った身体に眠りが誘う・・・・・・・・。

次の日、五所川原から十三湖まで行き、湊周辺を歩いた。真冬の十三湊には人影すら見えない、風除けの板塀に雪が凍て付いている。突然小学1年生くらいの男の子が駆けてきて「何処から来たのか」聞いた。「神戸から」と答えると「東京は知ってるか」と聞き返す「知ってる」と答えると「お父に早く帰ってほしい、オラもお母も待ってるから」伝えてほしいと寂しい目をして訴えるように頼むのだった。その健気な真剣さに「分かった、会えば必ず伝えるからね」と咄嗟に答えるしか出来なかった。都会でのうのうと暮らしている私には、出稼ぎ暮らしの寂しさや侘しさは理解する事は出来ない。

後ろめたさが、凍てついた風に吹かれて長い髪を顔の前でまとわり付かせ続けるのだった。

帰りに五所川原のバスターミナルに寄ってみた。大きな荷物を持った女たちが声高く卑猥に笑ってる。でもこれこそ人の生き様。出稼ぎに行ったお父たちよ、一日も早く無事で元気に帰って来いよ。そうして妻や子の寂しさと冷えた心と身体を温めてやってくれ、そう願わずにはおられない。

待合室のテレビでは南からの桜の便りのニュースが流れていた。

外に出ると吹雪になっていた。地走りの雪と風のすきまから津軽三味線の音色が風土と人を紡ぐように聞こえてきた。そんな重くて寒い北国津軽の旅だった・・・・・・・・。



☞ 澄田 好信さん



中嶋 初恵さん ☞
& 福岡 キコさん



☞ 中嶋 初恵さん



隆二郎 ☞



☞ 中野 誠三さん



福岡 キコさん ☞



☞ 永井 ますみさん



矢谷 トモヨシさん ☞

Photo by Yukio Senmatsu

隆二郎 歌集 -17

第Ⅰ期「ばとこいあ神戸」で、1977年5月(「ばとこいあ神戸」レコーディングの頃)より少し前にメンバーだった神戸松蔭女子学院大学の籠池ゆみこさんが失恋してその恋が終わったというのを確認できなくて、いつまでもウジウジしていて忘れたい、忘れたいと言いながらいつまでもそこに留まっていた自分の心情を詩にして隆二郎に渡して、隆の補作詞・作曲で出来た歌。

籠池さんが「ばとこいあ神戸」のレコードの中で歌っている。「ばとこいあ神戸」第Ⅱ期でしばし隆がタイトルを変えて歌っていた。

私 (旧タイトル 私はすてて旅に出る)

詞 籠池ゆみこ 補作詞・曲 : りゅうじろう

冷たく寒い 冬は寂しい
待っていたけど 春は来ない
古い上着と 重たい扉を
私は捨てて 今旅に出る

思い出だけに すがりついて
昨日の影に おびえていた
そんな私に 愛想を尽かし
独り歩きを 始めたのも私

夢を見ることで ごまかしていた
私の明日と 今日の幸せ
可愛い女で いようとして
涙で甘えた 日もあった

強い女に なりたいし
優しい女に なってもひたい
生きてる私を 確かめながら
頑張りなさいと つぶやく夜更け
頑張りなさいと つぶやく夜更け

私

1)

冷たく寒い 冬は寂しい	C / G / F / G 7
待っていたけど 春は来ない	C / F / G 7 / C
古い上着と 重たい扉を	F / C / F / G 7
私は捨てて 今旅に出る	C / F / G 7 / C

2)

思い出だけに すがりついて
昨日の影に おびえていた
そんな私に 愛想を尽かし
独り歩きを 始めたのも私

3)

夢を見ることで ごまかしていた
私の明日と 今日の幸せ
可愛い女で いようとして
涙で甘えた 日もあった

4)

強い女に なりたいし	C / G / F / G 7
優しい女に なってもみたい	C / F / G 7 / C
生きてる私を 確かめながら	F / C / F / G 7
頑張りなさいと つぶやく夜更け	C / F / G 7 / C
頑張りなさいと つぶやく夜更け	C / F / G 7 / C

小林隆二郎 Memorial

「旅の移りに」

CD とリーフレット



SONG FOR THE PEOPLE
BY THE PEOPLE

CD

D i s k 1	1999 年まで
D i s k 2	風来とのコラボ集 (風来ライブとリハーサルから)
D i s k 3	日本国内ライブから
D i s k 4	臺灣から
D i s k 5	『ばとこいあ神戸』から I
D i s k 6	『ばとこいあ神戸』から II
D i s k 7 (Bonus Disk)	『ばとこいあ神戸』からの語り集

プラス2006年から2014年までの映像を取めたDVDを2枚つけます。

データディスクのため、パソコンで再生して下さい。

カンパ 1セット ¥3,000 (送料 ¥1,000)

リーフレット (2015年改訂版)

全136ページ

1999年秋の「新訂版」に2000年以降の唄の詩や、『ばとこいあ 通信』から抜粋したエッセイを付けました。

カンパ 1冊 ¥1,000 (送料 ¥500)

CDとリーフレット一緒の場合、送料は¥1,000です。

『人はみな旅人』 CD

1枚 500円

原稿を下さい。

次の『ばとこいあ神戸』の開催の前月末までに事務局へ届けてください。僕の主張だけしか無くなってしまいますので・・・。

ほんまに言いたいこと無い・・・？

よろしくね！

編集後記

2020年末からコロナ陽性者が急増して、2021年初頭には全国で7000人を超えた。ガースー政権は3000人を超えてからやっと「GO TO」とラベルを意図時停止した。5000人を超えた1月8日から2回目の「緊急事態宣言」を関東1都3県に発令し、さらに1月13日に「宣言」の拡大を発令した。ガースーは誰に忖度してるんやろうか？

アクセルとブレーキを同時に踏んでたら、機械でもすぐに壊れるよ。一定期間経済活動を止めてでも、パンデミックを終息へ向かわさないと二進も三進もいなくなるのが理解できないのかな？2年も3年もこの状態が続けばどうなっていくのか想像できないのか。このままじゃ中小企業や個人経営のお店は全部つぶれてしまうよ。奴らはそれを狙っているのかな？大企業一色の国にしたいのかな？これを機会に国民の文化を根こそぎ壊してしまうつもりかな？

こんな状況でもオリンピック・パラリンピックも強行しようとしている。アホちゃうか。更にいまだに「辺野古」も粛々と工事を続けている。ボケか！

いつまでこんな奴らに政治を任しておいてもええんか？ま、野党もまともな政策をようひねり出さんし、総論でよう一致せんし、訳の分からん「連合」がしゃり出て引っ掻き回して・・・。

もっと議員の質を高める方法を決められる人が立候補できるような方策を考えていかなあかん。

ということで各個人が感染防止の対策を徹底しましょう！

(千)